ISSN 2758-8076

福岡大学
国際センター紀要

第２号

令和5（2023）年度

Vol.2(2023)

The Journal of
Center for International Programs

福岡大学国際センター

福岡大学 国際センター 紀要 第２号

目　次

Ⅰ．巻頭言
福岡大学の国際化に向けた国際センターの取り組みについて
李　明哲・・・・・１

Ⅱ．研究ノート
韓国ドラマから見るジェンダー意識の向上
羅　義圭・・・・・２

Ⅲ．実践報告
インドネシア共和国と福岡大学の交流から学ぶ
三島　健司・・・・・７

Ⅳ．実践報告
COIL 型授業（トライアル版）の実践
新田　よしみ・・・１３

Ⅴ．編集規程および執筆要領　・・・・・１７

巻頭言

福岡大学の国際化に向けた国際センターの取り組みについて

国際センター長　李　明哲

少子高齢化が進む日本において、これから社会と経済の活力の維持・向上を図るためには、海外より多くの人材を受け入れ、真の開かれた国になることが必要不可欠である。九州経済調査協会がまとめた 2024 年版九州経済白書によると、九州の人手不足数は 22 年の 16 万 6 千人から、30 年は約 3 倍の 49 万 5 千人に急増する見込みである。このように九州地域を含む日本を取り巻く社会・経済環境が厳しさを増すなか、我が大学としてはより一層の国際交流の活性化を通じて、日本の成長に資する優秀な外国人留学生の獲得、これからの国際化社会に柔軟に対応できる日本人若手人材の養成に努めることが強く求められている。

ところが、日本学生支援機構によると、19 年度に 31 万人ほどだった外国人留学生はコロナ禍の影響もあり、21 年度は 24 万人程度に減っている。また、日本からの留学生は 1 万人になるなど、コロナ禍前の 1 割ほどに留まり、近年の日本の国際化に向けた取り組みとしては大変危機的な状況に陥っている。そこで、日本政府が 2023 年 4 月に策定した新たな留学生計画では、33 年までに外国人留学生を 40 万人受け入れ、日本人留学生を 50 万人送り出す目標を掲げ、現在文部科学省などを中心にその実施に向けた具体策を急いでいる。

一方で、福岡大学は 2034 年に創立 100 周年を迎えることとなり、20 年からは本学が目指すべき将来像とその実現に向けて 15 年間を 3 期に分け、それぞれの中長期計画を策定することとしている。国際センターでは、25 年度から始まる、第 2 期の中長期計画に連動する形で、学部留学生と大学院留学生の受け入れ、そして本学学生の海外派遣に向けた具体的な国際交流ロジックツリーとロードマップを作成し、学内の関連部署と連携をとりながら、福岡大学の国際化を強力的に推進していくことで、地域社会のニーズに応えていきたいと考えている。

2022 年度に創刊した「国際センター紀要」は、福岡大学の教職員の教育研究活動はもとより、国際共同研究の成果を発表する場として、また国際交流の実践報告を行う場として重要な役割を果たしてきている。これからも、この「国際センター紀要」が福岡大学の国際交流の情報発信源の一つとして、福岡大学の国際化の特色を国内外に広く情宣できることを強く期待したい。

研究ノート　　韓国ドラマから見るジェンダー意識の向上

羅　義圭 *

Enhancing Gender Awareness Through Korean Dramas

LA Euikyu

1　はじめに

近年、韓国でもフェミニズム運動が活発化し、若い世代の女性を中心にジェンダー・センシティブな感覚が広く共有されるようになった。2016 年 5 月の「江南駅通り魔事件」[1]や同時期に梨花女子大学で起こった大学当局と対立する女子学生たちの籠城闘争[2]がきっかけとなっており、同年 10 月に出版され、のちに映画化された小説『82 年生まれ、キム・ジョン』も韓国社会を大きく揺さぶった。

一方で日本においては 2020 年、感染症対策による在宅での余暇へのニーズが高まり、動画配信サービスを介し、第 4 次といわれる韓流ブームが始まった。『愛の不時着』や『梨泰院クラス』は南北問題や格差の拡大という韓国の社会問題への理解を深めるとともに、韓国において人権への関心が高まっていることを示す材料となったのではないだろうか。特に、韓国ドラマは女性視聴者が多いだけに、こうした「人権への関心」が「ジェンダー」問題から始まったのではないか。というのも、ドラマで取り上げられることが社会の変化の妥当性を反映するものだと筆者には思われるからである。

以上を踏まえて、本稿では、主人公やその仲間が「女性」にあたる属性を持ち、あるいは既存の社会秩序の中で弱者として位置づけられ、困難を抱えながらもいかに生きるかを模索する姿を描いて高評価を得た韓国のドラマを事例として、2018 年放映の『別れが去った:マイ・プレシャス・ワン』と 2022 年に放映された『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』を取り上げたい。この二つの作品は、家父長制に強く根づいてきたこれまでの韓国社会を批判し、多様性を反映しながら政治的な正しさを、より積極的に取り入れ、現実に勝る多様性を打ち出しているのが特徴である。さらに、本研究は 2014 年放映の『ミセン』を含め、3 つのドラマを取り上げる予定であるが、本稿では『別れが去った:マイ・プレシャス・ワン』と『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』の二作品を論じる。2016 年を境に韓国社会の「ジェンダー意識への変化」が浮き彫りになったと考えられる。しかも、「ジェンダー意識への変化」への影響には 2000 年代から現在までの韓国の社会的あるいは人口動態的な変化、すなわち核家族世帯の増加、女性の高学歴化や晩婚化、少子高齢化、終身雇用制の崩壊などが多少なりとも「女性のエンパワーメント」に影響していることも無視できないと思われるからである。

* 福岡大学共通教育センター外国語講師

女性の不条理を暴いた先行研究では、主にドラマ作品の内容面に重点をおいて論じられている山下(2013)のように、韓国の「ジェンダー意識」に関して作品に表れたイメージに着目した研究はあるが、本研究では韓国の「恨(한:ハン)」という視座を通して「私たち(우리:ウリ)」という視座を通して「私たち(우리:ウリ)」の物語を編み直す可能性への糸口を見つけることで、常に「わたし」が他者との関わりによって揺り動かされる受動的な存在であることを浮き彫りにすることを目指す。その前段階として、本稿では韓国においては人々のマルチカルチュラリズムの志向性が弱いため、現代韓流ドラマが意識変革のきっかけとなることを論じる。

2「多文化共生」とは?

「多文化共生」ということばは、自国内の少数民族(エスニック・マイノリティーズ)の権利の保護を促進することによって、その国内の融和を図ることを目的とした政策の意味で使われることが多い。カナダやオーストラリアの国家の原理として多文化主義や、アメリカでの多文化主義なども殆どの場合、この用法に入る。特に、カナダは 1988 年に多文化主義法が成立し、制度的な整備が整えられているが、日本での「多文化共生」は主に、社会意識上の問題として唱えられていることが特徴である[3]。韓国も単一民族国家と血統主義の傾向が強いこともあり、2000 年に入ってから東南アジアからの労働者の受け入れや「農村花嫁」としての女性の増加により、社会意識上への変革が求められるようになった。

「多文化共生」を考える上で大変重要なことは文化軸に関する「対立軸」が存在しており、その中で政治的不均衡(power-unbalance)の働きによって「マジョリティ―マイノリティ」の関係が固定化されていることである。この対立軸には人種をはじめ、民族、性別、年齢、世代、アビリティなどがある。

「多文化主義」でいう「多文化」とは、一つには我々が様々な文化の対立軸の交点として生きていることを意味する。一人の人間を例にとってみれば、その様々な文化対立軸のすべてでマジョリティの位置に立つということはおそらくないと思われる。逆にすべての対立軸でマイノリティであることもあり得ないだろう。「多文化」のもう一つの意味は、それぞれの対立軸は二項対立から成り立っており、対立軸を挟んだ双方の世界がそれぞれの文化を持つということである。つまり我々は、二項対立の一方の文化を生きているが、同時に他の文化を生きる者と共に生きていかなければならない。「多文化主義」では、この二つの意味の「多文化」の重層状況をどう生きるかを考える。そこでは、他者との間で暴力的にならないように「共同性や相互依存性」を持ちつつ共に生きる社会を創ることが多文化共生への着地点になるだろう。

ここで浮上する問題点が、日本と同様に韓国でも「多文化主義」への社会意識上、「自分たちの間にある差異について十分認識できずにいるため、マルチカルチュラリズムへの内発的欲求が全体としては低いといえる」[4]ことである。それは、韓国の歴史的背景によるが、

「同化圧力にさらされ、差異を抹消されてきたのは、他ならぬ日本国籍者自身であり、一種の<自己喪失>状態が日常化/一般化してしまった結果、差異を尊重し合うことへの志向性ももてずにいる」[5]ことと相通じるだろう。

日本での韓国ドラマの人気は、2004 年「冬ソナ」が日本の中年女性たちにノスタルジーを呼び起こし、それをきっかけとして旋風を巻き起こしたことは記憶に新しい。それにより、日韓の文化交流が活性化し、相互理解が可能になった点は評価すべきであるが、文化を規格化することで主に消費することに偏ったことは反省点として捉えねばならないだろう。

3 シスターフッドと個の狭間で:『別れが去った:マイ・プレシャス・ワン』を中心に

この作品は 2018 年 5 月 26 日から 2018 年 8 月 4 日まで文化放送で放映された。50 代と 20 代の既婚者と未婚者である二人の女性が同居を通して「夫と彼氏」との葛藤と結婚、そして妊娠をめぐり、「女性」の立ち位置をジェンダー視点から描いた。

まず、ソ・ヨンヒ(50 代)はキャリアウーマンとして会社でもその能力が認められ、順風満帆な社会生活を送る中、パイロット(後の夫)と出会い、結婚し出産と同時に、会社を辞めて専業主婦の道を選んだ女性である。しかし、夫の浮気により、彼女の生活が一変し、夫との別居中、精神病を患い、引きこもり状態で世の中と断絶するに至った。

このソ・ヨンヒには韓国の典型的な女性像が描かれている。あたかも「良妻賢母」のように、結婚と同時に自分の人生を犠牲にしてまで、夫と子どものために一生懸命に献身してきた結果が、夫の浮気(＝裏切り)により、自分がこれまで生きてきた存在意義が一瞬にして消えてしまう挫折感から精神的に崩壊する。そこから立ち直ることができず、不信感に晒され引きこもる中で、一人の女性、ジョンヒョ(20 代)が突然、現れるのだ。彼女はヨンヒの息子(ハン・ミンス)の彼女で、彼との間の妊娠に気づき、悩んだ末にヨンヒの家を訪れ、自分を受け入れるよう「交渉」し、やっと条件付きでヨンヒはジョンヒョを受け入れ、一緒に暮らすことになる。

この場面では、同じ女性として「シスターフッド」を感じることができる。「女」だからこそ、妊娠したジョンヒョを門前払いすることができない。彼女の崖っぷちに立っている「辛さ」を分かち合えるのは彼氏の母であるヨンヒであった。年齢の差はあるものの、一人は「妻/母」として、もう一人は「娘/彼女」としてこの世に生きてきたにもかかわらず、最後は同じ「女」として生きているという「共有可能な物語」が存在していたことは注目に値する。

このドラマが印象深いのは、「女」に焦点を当てて物語が展開されていることだ。これまで韓国社会で「女」とは、経済的・社会的に誰かに従属し、「自分として」生きることより、常に犠牲が求められるとともに「<自己喪失>状態が日常化/一般化」されてきたと言っても過言ではないからである。しかし、このドラマにおける、「異質なるもの」である二人の女性があたかも「女」であるという共通項を通して互いの存在に触発されるように、「束縛」

から解放されて「個」を再構築していく物語は大変新鮮だった。しかも、他者を通して、自己変革していく過程が巧みに描かれているのだ。単純に物語が「自分探し」に回収されず、突然現れたジョンヒョンを通して自己(ヨンヒ)を絶望の崖っぷちから救い出す、「女」の新しい地平を拓くべく、呼び掛けているような作品である。

4 女性のエンパワーメントの実現:『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』を中心に

この作品は日本でもよく知られているものであり、韓国では 2022 年 6 月 29 日から 2022 年 8 月 18 日まで、民放テレビではなくケーブルテレビで放映され、人気を博した。この作品が人気を集めた理由とは、主人公であるウ・ヨンウの人物像が視聴者の心を惹きつけ、彼女の世界にはまることで、視聴者の心が癒されたからではないかと思われる。

このウ・ヨンウは天才的頭脳と自閉スペクトラム症を同時に持っている新人弁護士で、大手法律会社で生き残りをかけて闘う人物として登場している。しかも、第 2 節でも述べた「重層性」を体現していることだ。彼女は常に社会の中で「二重」のマイノリティとして生きている。

一つ目は、「障がい者」である。「自閉スペクトラム症」を抱えながらも、天才的な頭脳を発揮して韓国の一流大学を首席で卒業した。

二つ目は、「女性」である。特に、韓国社会は儒教の影響もあり、男尊女卑[6]が強い国でもあった。その固定観念から「女性」を解放するために韓国でも梨花女子大学を中心にフェミニズム運動が 1980 年代から活発に行われた[7]。

この作品は、ウ・ヨンウのエンパワーメントの実現とともに、真の「多文化主義」を実現しているところが大変評価に値すると思われる。これまで、マジョリティの「許容と譲歩」が日本社会の「多文化共生」実現のための限界性でもあったことがよく指摘されてきた[8]。常に社会で他者化されてきたマイノリティ側は自己変革だけを求められてきたが、そこから社会運動を通して自分たちの「声」を発信することにより、マジョリティ側は「譲ってあげる」という社会意識が強かったのではないだろうか。

大手法律会社に就職したウ・ヨンウをめぐり、最初は周囲の上司と同僚たちは彼女が障がい者であることに先入観や劣等感を持ったものの、弱肉強食の社会で彼女を徹底的に排除しようと考えたのだ。しかし、彼女の仕事に対する「情熱さや人間味」に逆に自分たちの価値観が間違っていたことに気づく。彼女の思いがけない想像力と臨機応変さはそれまで敵対視及び同情心に陥ってきた上司や同僚たちを驚かせ、自分たちの自己変革までに至る。

とりわけ、突飛な行動をとるウ・ヨンウが作品の中で、「クジラ」の話をよくする度に、最初は偏見の目で見た人たちもその世界を共有していくストーリが展開されている。「禁じられた言葉、聞き取れない言葉、自分を抑圧する言葉」[9]を他者と共有していき、最後は他者(＝マジョリティ)が揺り動かされ、自己変革にまで至る過程は、「アイデンティティを確立するよう強く求めてきた近代の〈呪縛〉が解ける」[10]大きなヒントになると思われる。

グローバル化により、世界は市場と資本に独占され、国民国家主義は弱まっていると言われる一方で、「競争主義と能力主義」が言説化され新たな境界を作っている。ここで非常に重要なことは、いかに「力のある側」が自己変革を実践し、「力のない側」と共に生きる社会を創造していくか、その物語を編み直していくことであろう。

5 まとめ

2016 年以降、韓国で放映された「女性」を主人公にしたドラマを通して、これまで抑圧されてきた「女性」が自分の物語を編み直し、他者との関係を再構築し、最後は真の「多文化共生」への途に至る、女性の生き様を垣間見ることができた。要するに、「女性」が韓国社会の骨格をつくりかえす「主体」になりつつあると言えるだろう。

今後の研究課題として、韓国の「恨(한:ハン)」を位置づけた上、晩婚化・非婚化、そして離婚率の増加による「生活構造」の変化に伴う「女性意識の革命」に迫ることで韓国社会の実態をさらに浮き彫りにしたい。

注

[1] 2016 年 5 月 17 日に、韓国ソウル瑞草区のカラオケバーのトイレで発生した、34 歳の男性が面識のない 23 歳の女性を刺し殺した殺人事件である

[2] 発端は 2016 年 7 月 28 日、梨花女子大が「未来ライフ大学」という名の単科大学の新設を決定したことにある。これに反対する学生が学内デモに決起し、大学本館を占拠して座り込みを開始した。当局は警察権力 1600 人を投入して鎮圧を図ったが、学生は解散を拒否して籠城を続けた。闘いはネットを通じて卒業生にも拡大し、追い詰められた当局は 8 月 3 日に計画を白紙撤回した。

[3] 鄭暎恵(2003)『<民が代>斉唱』岩波書店、202-216

[4] 前掲書、217

[5] 前掲書、217-218

[6] 2014 年放映した『ミセン』によく描かれている。例えば、セリフの中に「会社にとって働く母親は罪人も同然（子を持つ女性社員)」「それのどこがセクハラなんだ。気性の荒い女ばかりで困る」「女が淹れた方がコーヒーはうまい」など。

[7] チャン・ピルファ［ほか］(2006)『韓国フェミニズムの潮流』明石ライブラリー

[8] 米山リサ(2002)『暴力・戦争・リドレス―多文化主義のポリティクス』岩波書店、羅義圭(2020)「日本社会で<多文化主義>を考察する意義」筑紫女学園大学研究紀要第 15 号

[9] 鄭喜鎭編(2021)『#MeToo の政治学 ： コリア・フェミニズムの最前線』大月書店、12

[10] 鄭暎恵(2003)、229

参考文献

⑴ チャン・ピルファ［ほか］(2006)『韓国フェミニズムの潮流』明石ライブラリー
⑵ 鄭暎恵(2003)『<民が代>斉唱』岩波書店
⑶ 鄭喜鎭編(2021)『#MeToo の政治学 ： コリア・フェミニズムの最前線』大月書店
⑷ 羅義圭(2020)「日本社会で<多文化主義>を考察する意義」筑紫女学園大学研究紀要第 15 号
⑸ 山下英愛，2013『女たちの韓流:韓国ドラマを読み解く』岩波書店
⑹ 米山リサ(2002)『暴力・戦争・リドレス―多文化主義のポリティクス』岩波書店

インドネシア共和国と福岡大学の交流から学ぶ

三島　健司 *

1. はじめに

インドネシア共和国、通称インドネシアは、東南アジア諸国連合（ASEAN）の本部がインドネシアの首都ジャカルタにあり、ASEAN 盟主と世界から考えられており、人口が世界第 4 位で、2 億 7000 万人を超える規模である。インドネシアにとって日本は、輸出入ともに最大の貿易国の一つとなっており、相互に重要な国となっている。2023 年 8 月に私は、研究調査にて、インドネシアのジャカルタとジョグジャカルタを訪問した。福岡大学は、2010 年から工学部を中心に、いつくかのインドネシアの大学と部門間協定（学部と学部の協定）や大学間協定を締結している。幾つかの共同研究を行い、国際ジャーナルに研究論文を掲載し、学生の短期相互訪問などの国際交流を行っている。それらの交流により、強い信頼関係が構築されている。2023 年 3 月には、インドネシアの首都ジャカルタにある州立イスラム大学ジャカルタ校（STATE ISLAMIC UNIVERSITY SYARIF HIDAYATULLAH JAKARTRA；UIN）の理工学部（FACULTY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY）の講師であるフェリ・ファリアント（Feri Fahrianto）氏が、本学工学研究科、情報・制御システム工学専攻（主査：大橋正良教授）博士課程後期を修了し、博士号を授与されている。私も、古くからの友人が大勢いる。今回のインドネシア訪問に際して、事前に友人に連絡しておいたところ、州立イスラム大学ジャカルタ校のアセップ・サエプディン・ジャハール（Asep Saepudin Jahar）学長から、大学近くのホテルで会いたいとの要請があり、学長の昼食会に参加した。UIN ジャカルタ校と福岡大学の交流は、極めてよい結果をもたらしているので、今後も交流を発展させてほしいとの依頼があった。このように福岡大学は、海外の他大学と良好な関係を構築しているが、キャンパス内のグローバル化は、十分進んでいないのが現状である。

「学校法人福岡大学第一期中長期計画（令和 2 年～6 年度）に掲げられた目標「多様な人が集うダイバーシティキャンパスの実現」に向け、福岡大学は、諸事業に取り組んでいる。キャンパス内において日本人学生と外国人留学生が多様な価値観に触れ、お互いに理解を深めながら共に育つ機会を福岡大学が提供し、グローバルな人材を求める社会からの要請に応えるために、福岡大学は、学部留学生割合に関する目標値を 2029 年度までに 2%、2034 年度までに 4%としている。そして、その数値目標達成のために、学部留学生選抜入試の改革（令和 7 年度から新選抜（前期日程））などを計画している。「多様な人が集うダイバーシティキャンパスの実現」には、海外の学生が、福岡大学の魅力を知ることが重要である。その際、福岡大学がいままで培ってきた海外からの評価・関係性が重要となる。そこで、ここでは、福岡大学が、海外の他大学と良好な関係を構築している一例として、2010 年の初回訪問から 2023 年までの交流について述べることで、インドネシアの大学との関係構築とその後の持続的な活動を国際交流の観点から解説する。

---

*福岡大学工学部教授（前国際センター長）

2. 交流の始まり

インドネシアとの本格的な交流のきっかけは、2009 年文部科学省の「教育研究高度化のための支援事業に福岡大学の「ワンキャンパス集積型総合大学の教育研究高度化支援プロジェクト」が採用されたことである。この予算の一部を利用して、2010 年 11 月にインドネシア・ジャカルタ市内の国立研究所における物づくり技術の現地調査を行う機会があり、同地域にある州立イスラム大学ジャカルタ校理工学部の調査を 2010 年 11 月 4,5 日に行った。11 月 4 日は、州立イスラム大学ジャカルタ校の医学・衛生科学部の設立 6 周年記念式典であったため、その式典に私も参列した。日本側からは、塩尻孝二郎；在インドネシア共和国特命全権大使、小原基文（JICA Indonesia Office Chief Representative）氏らが参列していた。席がとなりであったので、州立イスラム大学ジャカルタ校について尋ねたところ、信頼できる大学であり、日本政府からも JICA などを通じて多額の寄付が行われていることがわかった。州立イスラム大学ジャカルタ校の医学・衛生科学部に対しては、ビル建設・設備設置などに約 29.83 億円の支援があったそうである。（国立イスラム大学ジャカルタ校開発プロジェクト;Universitas Islam Syarif Hidayatullah Jakarta; UINDP-JICA LOAN No.530 参照。）

また、11 月 4 日の午後に訪問したインドネシア・ジャカルタ市内の国立研究所における聞き取り調査においても、いずれの研究員も州立イスラム大学ジャカルタ校が信頼できる大学であり、イスラム教過激派などの入り込む余地がないことを証言していた。

3. イスラム大学ジャカルタ校の歴史

州立イスラム大学ジャカルタ校（STATE ISLAMIC UNIVERSITY SYARIF HIDAYATULLAH JAKARTRA；UIN;Universitas Islam Negeri Syarif Hidayatullah or UINSH）は、1957 年にジャカルタの郊外南西部のチプタット地域（Ciputat District）にインドネシア宗教省によってイスラム教教育者養成のための大学として設立された。1998 年にイスラム教教育者養成プログラムとその他の心理学部、経済学部、理工学部の学生のためのプログラムが確立された。2002 年にイスラム大学ジャカルタ校（STATE ISLAMIC UNIVERSITY SYARIF HIDAYATULLAH JAKARTRA；UIN）となった。州立イスラム大学ジャカルタ校では、2004 年に、医学・健康科学部が設立された。現在、イスラム大学ジャカルタ校には、教育学部、心理学部、宗教学部、経済学部、イスラム法律学部、政治学部、コミュニケーション学部、道徳学部、理工学部、医学・衛生科学部など 10 学部があり、約 23,000 人の学生が通っている。インドネシアは、生活レベルが向上しており、多くの私立大学がある。イスラム大学ジャカルタ校以外にジャカルタには、国立インドネシア大学とジャカルタ国立大学がある。州立イスラム大学の医学部以外の学費は他の国立大と比較しても低く、半期の学費は、300～500 万ルピア（100 ルピアがおよそ 1 円）であり、他の私立大学の学費（600～800 万ルピア）と比較して、安価である。そのため、学生学力は比較的高い。

4. 州立イスラム大学ジャカルタ校理工学部教員との打合せと講演

2010 年 11 月 4 日午後より、写真 1 に示すような理工学部教員との打合せと講演会（福岡大学・工学部の三島と国立イスラム大学ジャカルタ校の理工学部副部長・教務担当のアグス・サリム氏が各大学・学部についてパワーポントデータを用いて講演）が開催された。このアグス・サリム先生とは、その後も十数年にわたって交流が続き、他のインドネシアの大学の副学長となられた折も、福岡大学の客員教授として、福岡大学との交流に尽力された。

打合せは、部門間協定を締結するためには時間がかかるが、双方が努力すること、共同研究の可能性を探索すること、学生、教員の留学の可能性を探索することなどが話し合われた。

写真 1．　理工学部教員との打合せと講演会（福岡大学・工学部の三島と州立イスラム大学ジャカルタ校の理工学部副部長・教務担当のアグス・サリム氏が各大学・学部についてパワーポントデータを用いて講演）の様子。

研究講演会

2010 年 11 月 5 日午前に、写真 2, 3 に示すように、理工学部教員と学生を対象として、研究講演会（福岡大学・工学部の三島が、最近の研究テーマとワンキャンパスプロジェクトの成果についてパワーポントデータを用いて発表した。）が開催された。

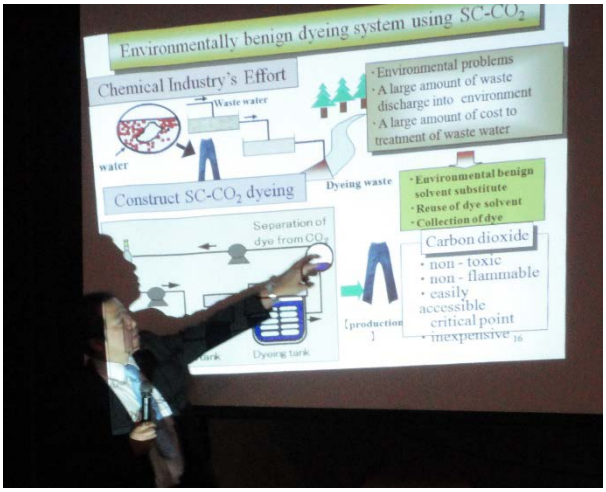

写真２．５日午前の講演会

写真３．　講演会の様子

この時の会議で、具体的な国際交流の基本方針（毎年、相互に数人の学生が適当な時期に訪問することやコストの負担方法。）と、共同研究の具体的な目標値（5 年以内に国際ジャーナルへの投稿）などが話し合われたことが、その後、10 年以上続く交流に繋がったと考えられる。

5. 協定の締結とインターネットを活用した交流の継続

インドネシア共和国の首都ジャカルタにある州立イスラム大学ジャカルタ校（STATE ISLAMIC UNIVERSITY SYARIF HIDAYATULLAH JAKARTRA；UIN）の理工学部（FACULTY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY）と福岡大学工学部との間で、2011 年 4 月に部門間協定が締結している。

交流・講義・講演としては、以下のようなものがある。

１）2010 年 11 月 4,5 日に工学部の三島健司が、国立イスラム大学ジャカルタ校理工学部にて、講義「日本における化学工学」（60 分、2 回）を行った。

２）2011 年 1 月 13 日午後 3 時～4 時に 11 号館工学部 B 会議室にて、州立イスラム大学ジャカルタ校理工学部訪問団と福岡大学工学部国際交流検討ワーキング・グループによる交流会議が行われた。自己紹介の後、次のようなことが話し合われた。
３）2011 年 1 月 13 日 10 時～12 時　インドネシア共和国の州立イスラム大学ジャカルタ校の情報処理施設と福岡大学総合情報処理センター施設とのインターネット接続によるインターネット講義・会議
４）2011 年 1 月 10 日～16 日の期間に、ジャカルタ校（STATE ISLAMIC UNIVERSITY SYARIF HIDAYATULLAH JAKARTRA ; UIN;Universitas Islam Negeri Syarif Hidayatullah or UINSH）より、理工学部（FACULTY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY）の学部長　ソフィアンシャハ・ジャヤ・プトラ教授（DR. Syopiansyah Jaya Putra, M.Sis ; 工博）を代表とする理工学部訪問団４名の教員･研究者が、福岡大学工学部との交流を深めるために、福岡大学を訪問した。2011 年 1 月 13 日午後 3 時～4 時に 11 号館工学部 B 会議室にて、国立イスラム大学ジャカルタ校理工学部訪問団と福岡大学工学部国際交流検討ワーキング・グループによる交流会議が行われた。
５）2011 年 9 月 2 日～12 日にインドネシア共和国の州立イスラム大（昨年、三島が先方を訪問し、大学の学部間協定を締結した。）の学生 9 名と教員 3 名が福岡大を訪問した。講演会・講義・ビジネスプランコンテスト見学、インターネット会議・工場見学・高校見学を実施した。
６）2011 年 9 月 3 日 iPad アプリの作成に関する講義　10 時～11 時福岡大学工学部 6 号館 640 教室にて。ジャカルタ校の学生 9 名、博多高校 12 名が参加した。
７）2011 年 10 月 21 日～23 日にインドネシア共和国のジャカルタ校の理工学部を福岡大学工学部三島健司が再度、訪問し、22 日、23 日に、講演・講義を行った。講義題目「環境に優しい化学工学技術の実用化」
　このような交流が、2019 年の COVID19 流行前まで続いた。その後、コロナ禍のため、具体的な人の移動を伴う交流は、2020 年～2022 年ごろには行われなかったが、インターネット用いた会議は、2011 年から現在も継続している。さらに、コロナ禍からの回復にともない、2023 年には、人の移動を伴う国際交流も 2019 年以前と同様に復活している。

6. 国際交流の恩恵

　これらの国際交流のおかげで、福岡大学内におけるイスラム教徒に対する対応が大幅にグローバル化した。イスラム教徒は、一般に極めて敬虔な信者が多く、信仰心が強い。イスラム教徒ではない我々から見ると、「厳しい戒律」でも、それを守った生活をしている。食事や、お祈りなどについても、宗教上の決まりを守っている。「ハラール」という言葉があり、ハラールとは、イスラム法によって「許されたもの」を意味し、行って良い事や食べる事が許されている食材や料理を指す。「禁止されるものまたは行為」はハラームである。現在の世界は、種々の人種、宗教信者がともに活動する社会、組織、企業が急速に拡大してお

り、各組織のグローバル化と多様化が望まれている。日本の大学にも、多様性の教育が望まれており、多様な文化への理解が必要不可欠となっている。20 年前であれば、ほとんどの福岡大学の関係者が、「ハラール」という言葉やイスラム教徒の生活習慣を知らなかったと思われる。ジャカルタ校との交流だけが原因ではないが、現在では、ハラール食に対する対応や、イスラム教徒がお祈りをする部屋への配慮など、多くの配慮がなされるようになり、福岡大学に通う学生に対しても、国内に居ながら、グローバル化を経験する機会も増えつつある。

私の所属する工学部・化学システム工学科では、ここ十年の間に、国際学会に参加する学生の数が飛躍的に増大した。さらに、国際学会でも、それらの学生の中から、学生賞などを受賞する者も増え、大手有名企業に就職する学生数も増えた。大学院への進学者数も増えつつある。昨年は、4 割の学生が大学院へ進学している。卒業生や保護者の方々から感謝の言葉をいただく機会も増えたように感じている。

7. 今後の「多様な人が集うダイバーシティキャンパスの実現」

少子高齢化が進む現在の日本の大学においては、質の高い受験生を数多く確保することは、きわめて重要な課題となると思われる。受験生やその保護者の方々の立場で考えると、グローバル人材教育を行う福岡大学は、きわめて魅力的な大学で、大手有名企業に就職する学生数や会社経営を行う先輩卒業生の数も、その魅力を増幅すると思われる。海外からの留学生数が増えることは、これらに直結するので、そのために入試改革などについては、今後も、多くの方に継続的に検討いただきたいと考える。

さらに、海外からの留学生が、彼らのことをよく理解できる日本人が多く福岡大学に存在するためにも、海外渡航経験のある福岡大学の学生数を増やす予算措置や学内生徒の語学力向上の種々の施策が、今後も重要であると思われる。

実践報告

COIL 型授業（トライアル版）の実践

新田　よしみ*

The Implementation of COIL class (Trial version)

NITTA Yoshimi*

Abstract: After the COVID-19 pandemic, exchange students or international students are on campus. With many opportunities to study with them, we have started a new type of COIL class with students at Curtin University, Australia. In this class, Japanese students had to talk with Curtin University's students online in English, so it was an excellent chance to foster their intercultural and English-speaking skills simultaneously.

Keywords: COIL class, intercultural communications
キーワード：COIL 型授業、異文化コミュニケーション

１．はじめに―COIL 型授業とは―

COIL（Collaborative Online International Learning）とは、オンライン教育手法の進化を国際的な大学間交流に応用した国際的・双方向的な新しい教育実践の方法である。[1)] アメリカのニューヨーク州立大学 COIL センターによって 2004 年に開発された、ICT ツールを用いて、海外の学生とオンラインでプロジェクトを行う教育手法を指す。平成 30 年度に文部科学省が「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」と題した選定事業を行ったことも後押しして、2014 年に日本で初めて COIL 型教育をスタートさせた関西大学や、お茶の水女子大学、大阪市立大学、上智大学や琉球大学など、国公私立大学問わず多くの大学で、学生の海外留学への機運を高めるために取り入れられている。

COIL は、Zoom 等のテレビ会議システムで海外の大学の教員や学生とつないで共同で授業を行ったり、録画した映像を視聴した後学生同士でコメントのやりとりをしたり、SNS を使いメッセージを交換したり、課題解決型のプロジェクトを共同で行うなど、その教育手法は多岐にわたる。

福岡大学でも人文学部や商学部で COIL 型の授業が実施されているが、今回、学生が海外の学生とオンラインで交流し、英語で発信する力をつける機会を提供するために、国際センターが実施する特別授業にて COIL 型の授業を行うこととした。本論文では、本学協定校の一つであるカーティン大学の学生と Zoom を用い、トライアルとして実施した COIL 型授業について報告する。

２．概要

２－１．クラスについて

国際センターが開講する令和５年度前期の特別授業のうち、筆者が担当する木曜５限 Introduction to Global Career Design において COIL 型授業を行った。グローバル人材育成を目標として開講している特別授業は、受講学生のグローバルマインドを育成することを目指している。交換留学生や学部留学生も受講し、授業内で日本人学生と外国人留学生が深く関わり、相互に

*福岡大学国際センター准教授

学びあう環境にある。全学部全学年から様々な学生が受講しているため、教員の説明はすべて英語でなされるが、必要に応じて日本語での補足説明を行い、学生の理解を深めるよう努めている。

２－２．受講者について

人文学部４名、法学部１名、経済学部６名、理学部１名、工学部１名の計１３名が受講した。学年の内訳は、１年生が１名、２年生が４名、３年生が５名、４年生が３名であった。

２－３．協同学習に協力した外国人学生について

オーストラリア、カーティン大学化学石油工学部（School of Chemical and Petroleum Engineering）４年生の女子学生１名が、オンラインでの協同学習に協力した。カーティン大学がある西オーストラリアパース市と福岡市の時差は１時間であり、日本の方が１時間進んでいる。オンラインで海外の学生とつなぐ際に、時差がほとんど影響しないということは、授業を運営するにあたり非常に助かる要素であった。当該学生が就職活動などを終えており、比較的時間に融通が利くというのは大きなメリットであった。最後に当該学生は、令和 4 年度 11 月に、国立研究開発法人化学技術振興機構が主催するさくらサイエンスプログラムにて本学に来学した際、本学学生との交流を行っており、本学の学生の性格や英語力を多少なりとも知っていたというのも大きい。

なお、オンライン交流と対面での交流には差があるのかを検証するため、フランスからの交換留学生にも協同学習に協力してもらった。

３．授業の内容

３－１．授業で扱ったテーマ

授業名は Introduction to Global Career Design であるが、グローバル・キャリアに関するテーマではなく、キャリアの一つとして海外留学をした際に、現地学生と協同でプロジェクトを遂行すると仮定しテーマを選定した。カーティン大学の学生が化学を専攻していたことと、さくらサイエンスプログラムのテーマが SDGs であったので、協同学習のテーマも SDGs とした。17 あるゴールのうち、日本人学生に理解しやすいであろう Goal 5（Gender Equality）と Goal 6（Ensure availability and sustainable management of water and sanitation for all)を扱った。

３―２．授業の構成

全 7 回の授業を 1 ユニットとし、それぞれの Goal を扱った。第１回目は SDGs それぞれの Goal 概要を学んだ。補足説明を行う代わりに、学生をグループに分け、ウェブサイトなどに書かれている情報を自分たちの言葉でまとめて簡単に発表してもらうことで、Goal について理解を深めてもらった。第 2 回目は海外の学生へインタビュー準備とし、質問する内容をグループに分かれて検討、英訳をしてもらった。第３回目の授業でカーティン大学の学生ならびにフランスからの交換留学生に、前週に準備した質問項目をインタビューし、回答をメモする作業をした。第４回目から６回目は、インタビューで得られた回答を整理しプレゼンテーション資料を作成する時間とし、第７回目の授業で発表した。

これを２セット、前期授業期間に行った。このうち、オンラインで行った授業はインタビューに２回、プレゼン発表に２回、そのほか自己紹介で１回、追加のインタビュー実施で２回の全７回である。

1. How long do you take showers?

2. How often do you take showers a week?

3. Please tell us the names of the manufacturers of water.

4. How much is a bottle of water?

5. Is the bottle of juice cheaper than that of water? (Why? Why not?)

図１　インタビュー項目

４．結果

本授業を受講した学生の英語のレベルはあまり高くなく、またオンラインで海外の学生と英語で話すという経験は、ほとんどの学生にとって初めてであった。そのため、ジェスチャーが使えない、また相手の雰囲気がわからない状況で、英語を話すということは、容易ではなかった様子であった。オンラインで会話した際に、自分の英語があまりにも伝わらないことで自信を失いかけた学生もいたが、周りのサポートのおかげで最後まで頑張ることができたようである。

加えて、通信状況により、スムーズなやり取りができない時間が出てしまい、チャット機能を用いたコミュニケーションを強いられたことがあった。結果として、チャットに関わらない学生が時間を持て余すこととなってしまった。

最後に、学生にとって授業で扱った SDGs について理解することが難しかったという点も考慮しなければならない。そのため授業で学習したことをもとに海外の学生にインタビューを行うという当初の計画とは異なり、SDGs とはあまり関係の無い質問項目が含まれることとなった。

前期最後の授業にて、学生に授業の感想を尋ねたところ、ほぼすべての学生が、オンラインよりも対面での方が、英語で自信をもって会話できた気がすると回答した。その理由としては、“ジェスチャーの有無”“相手の雰囲気を感じられる”“通信の障害が無いため、会話にタイムラグが生じない”などが挙げられた。オンラインでの交流に対しては、“自分の聞きたいことを聞くことができ、また的確な回答をいただけたことが自信となった”“Zoom の画面上で英語を話すことは初めてであったが、相手がしっかり聞いてくれたので、臆することなく話せた”といった、英語でのやり取りが成立したことに対する満足度が高かったようであった。

あなた 17:49
I see.

Jam 17:49
So it just depends on how hardworking students are.

あなた 17:50
I see.

Jam に 全員 17:43
For Australians, TAFE would get them a job quicker since we have a lot of mine sites so after TAFE they can go directly to work instead so it's more popular for most high school kids

図２　チャットでのやりとり（抜粋）

５．今後の課題

令和５年度は SDGs を扱ったが、日本人学生にとっては理解するのに少し難しい様子であったので、来年度は、双方の学生が学びやすいテーマ設定が必要であると考えている。また、本年度はこのクラスのレベルを beginner にしていただき、学生の英語レベルに差があり、外国人留学生とのやり取りに支障をきたすシーンが見られた。来年

度は、クラスのレベル設定を見直し、双方向のコミュニケーションに影響が出ないような準備が必要である。クラスシラバスについても同様に見直し、海外協定校とのオンライン交流に入る前の事前準備や、自己紹介などアイスブレーキングに割く時間を増やしたいと考えている。

本年度はトライアルとして実施したので、課題の多い結果となったが、受講者の満足度は高かったようである。本年度の課題を次年度に生かし、より魅力的な授業を構築していきたい。

注

[1] 関西大学 Institute for Innovative Global Education ウェブサイトを参照した。
https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/

Ⅴ．編集規程および執筆要領

「福岡大学国際センター紀要」編集規程

1．名称

本紀要の日本語名称を『福岡大学国際センター紀要』とし、その英語名称を「The Journal of Center for International Programs」とする。

２．刊行の趣旨

福岡大学国際センター（以下「国際センター」という）に勤務する教職員の研究・教育活動及び国際交流実践並びに国際共同研究の成果を発表する場とし、国際センターウェブサイトを通して広く国内外にアピールすることを目的とする。

３．掲載対象

掲載対象は、以下のものとし、編集委員会が適当と認めたものとする。

(1) 日本語研究、日本語教育及びその調査・研究、日本文化研究、日本文化教育及びその調査・研究
(2) 留学生アドバイジングに関わる調査・研究、留学生ニーズ・留学実態に関わる調査・研究
(3) 高等教育の国際化に関わる調査・研究
(4) 第二言語習得に関わる調査・研究、多文化交流教育に関わる調査・研究
(5) 国際共同研究に関わる調査・研究、国際共同シンポジウム・学術ならびに学生交流施策に関わる調査・研究
(6) その他、編集委員会が適当と認めたもの

４．投稿資格

下記の者の投稿を認めることとする。

(1) 福岡大学に勤務している教職員（非常勤講師を含む）
(2) 福岡大学の元教職員（非常勤講師を含む）で、退職して５年以内の者
(3) 共同執筆者に上記(1)（2）がいる場合
(4) そのほかに国際センターと連携し、本センターの推進する業務に携わるもので、編集委員会が適当と認めた者

５．原稿の制限

原稿は未公刊のものに限る。

６．原稿の種別

(1) 研究論文
(2) 調査報告または実践報告
(3) 研究ノート

７．執筆言語

執筆言語は、日本語又は英語とする。

８．編集委員会

⑴ 本誌の編集にあたっては、編集委員会を設置する。

⑵ 編集委員会は、国際センター長、国際センター長補佐および国際センター委員から構成する。

９．査読

⑴ 執筆者は自身の原稿に対する査読者（学内及び学外いずれも可）を編集委員会に２名推薦する。

⑵ 編集委員会が選出した２名の査読者が査読を担当する。

⑶ 査読は研究論文のみ行う。

⑷ 調査報告・実践報告及び研究ノートは編集委員２名で編集及び校正を行う。

１０．発行回数

発行は年１回とする。

１１．投稿締切

毎年 11 月末日を締切日とする。

１２．原稿の提出

電子媒体による完全原稿の提出を原則とする。

１３．校正

校正は、編集委員会のコメントに基づき、執筆者本人が所定の期日までに行う。

１４．著作権

本紀要に掲載された論文等の著作権は、著者及び国際センターに帰属するものとする。

国際センターは、掲載原稿を電子的な手段で配布する権利を有するものとする。

ただし、編集委員会に連絡の上、掲載原稿を著者の著作物に掲載することや電子的な手段で公開・配信することは可能とする。その場合、本紀要に掲載されたものであること、号数などを含めて明示するものとする。

なお、本誌は本学国際センター公式ウェブサイトならびに本学機関リポジトリに掲載する。

１５．庶務

編集委員会の庶務は国際センター事務室が担当する。

１６．その他

この編集規程の改廃は、国際センター運営委員会において行う。

附則　この編集規程は、令和６年６月１日から施行する。

『福岡大学国際センター紀要』執筆要領

１．原稿の体裁

⑴ 原稿は、A4 版横書きとし、上下左右の余白をそれぞれ 3 センチ取る。

⑵ 使用する文字は、和文の場合は「明朝体」、英文の場合は「Century」とする。本文の文字の大きさは、和文の場合は 10.5 ポイント、一行を 40 字、一頁を 35 行とする。（行と行の間隔は 0 行）。英文の場合は 12 ポイント、一頁の行数を 35 行とする（行と行の間隔は 0 行）。

⑶ 原稿の上限は、研究論文は 20 頁、調査報告・実践報告は 15 頁、研究ノートは 5 頁程度とする。提出原稿に、研究論文、調査報告・実践報告、研究ノートの種別を明記する。

⑷原稿を和文で執筆する場合は、和文・英文両方の表題をつける。英文で執筆する場合は、英文の表題をつける。

２．原稿の構成

２－１．研究論文、調査報告・実践報告、研究ノート

⑴ 研究論文、調査報告・実践報告（和文）の場合は、「タイトル、氏名、要約（500 字以内）、キーワード（3～5 語）、本文、注、文献リスト」の順とする。

⑵ 研究論文、調査報告・実践報告（英文）の場合は、「タイトル、氏名、要約（200 語以内）、キーワード（3～5 語）、本文、注、文献リスト」の順とする。

⑶ 研究ノートの場合は、和文・英文どちらも「タイトル、氏名、本文、注、文献リスト」の順にする。

２－２．謝辞や付記

記載する必要がある場合は、文献リストの後に記載する。

３．表題・著者名・所属等

表題は、1 頁目の 1 行目に本文と同じ文字で中央寄りに記載する。副題をつける場合は、ダッシュ（—）ではさむ。

表題から 1 行あけて、著者名を中央寄りで書く。著者が複数の場合もすべて同様にする。日本人著者名を英語表記する場合は、姓・名の順序で記述し、姓はすべて大文字、名は頭文字のみ大文字にし、両者の間には「,」をいれない。外国人著者名の英語表記については、Family Name, Given Name の順序で記述し、Family Name はすべて大文字、Given Name は頭文字のみ大文字にし、両者の間には「,」を入れる。共著者も同様。一行あけて、要約（アブストラクト）を始める。

著者名にはアスタリスク（*）を付し、一頁目の脚注に所属を記載する。著者が複数の場合は、アスタリスクを増やしていく。（例　**, ***）。所属の記載方法を以下のとおりとする。

⑴福岡大学の教職員の場合は、所属と職階を記載する。（例　福岡大学国際センター講師）

⑵福岡大学の非常勤で本務校がある場合は、所属と職階を記載し、（　）付きで「福岡大学非常勤講師」と記載する。（例　東北大学大学院工学研究科教授（福岡大学非常勤講師））

⑶福岡大学の非常勤講師で本務校がない場合は、複数の大学に出講していても「福岡大学非常勤講師」と記載する。

⑷ ⑴-⑶に該当していた教職員で、福岡大学を退職して 5 年以内の者については、「元」をつける。（例　元福岡大学工学部教授）ただし、福岡大学の名誉教授の場合は、「福岡大学名誉教授」と記載する。

⑸福岡大学に勤務していない場合は、所属と職階を記載する。

４．要約（アブストラクト）キーワード

要約は一つのパラグラフで構成する。余白の取り方は本文と同じ。和文の場合は「要約」、英文の場合は「Abstract」を中央に記載し、行をあけずに書き始める。要約の後、1 行あけて本文を書き始める。

研究論文に関連するキーワードを 5 つまでアブストラクトの下に記載すること。

５．本文の構成

本紀要の指定フォーマットを使用する。

６．注・参考文献

注(Notes)は脚注を用いず（一頁目で著者の所属を表すために用いる場合は除く）、文末脚注、参考文献の前にいれる。参考文献は、研究論文等の最後に和書・洋書共に著者名のアルファベット順に一括してあげる。同一人物の文献は年代順に古い方から記載する。

７．図表・写真について

投稿者のオリジナルでない図表、写真等を使用する場合は、投稿者が使用許諾を得る。

人物が判別できるような写真を使用する場合は、投稿者が本人の承諾を得る。

表には、和文の場合は「表１」、英文の場合は「Table 1.」のように番号をアラビア数字で表の下に中央寄せで記入し、その下の行にタイトルをつける。タイトルの文字は本文と同じ文字を使用する。英文の場合は、各単語を大文字で始め、斜体にし、ピリオドをつけない。和文の場合は、斜体にせず、ピリオドをつけない。データを区分するため、水平線は使えるが、垂直線は避ける。

図には、和文の場合は、「図１」、英文の場合は「Figure 1.」のように番号をアラビア数字で図の下に中央寄せで記入し、同じ行にタイトルをつける。英文の場合は、最初の文字だけ大文字にし、ピリオドをつけない。

図や表の前後に 1 行挿入する。

８．投稿原稿の取扱いおよび校正

(1) 投稿者は、完全原稿を提出する。

(2) 編集委員会は、投稿された原稿について指摘（掲載対象区分の変更要請も含める）を行うことがある。投稿者は、編集委員会による指摘事項に対し、投稿者の責任において対応する。指摘に十分に応じることができなかった場合は、不掲載となる場合がある。

(3) 校正は 1 回とする。

９．研究倫理の遵守

「人の行動、環境、心身等に関する個人の情報等の提供を受けて行う研究」に関する原稿（研究論文、調査報告・実践報告、研究ノート）を執筆する場合は、「福岡大学研究倫理規定」を遵守する。

以上

編集

福岡大学国際センター紀要編集委員会

編集委員長　李　明哲　（福岡大学国際センター長　経済学部教授）

編集委員　高橋　美知子（福岡大学国際センター長補佐　人文学部教授）

鈴木　慎也　（福岡大学国際センター長補佐　工学部教授）

安井　英俊　（福岡大学国際センター委員　法学部教授）

勝本　之晶　（福岡大学国際センター委員　理学部教授）

森口　哲史　（福岡大学国際センター委員　スポーツ科学部教授）

福岡大学国際センター紀要

第 2 号

令和 5（2023）年度

発行日　令和 6（2024）年 6 月 1 日

編集・発行　福岡大学国際センター

〒814-0180

福岡市城南区七隈八丁目 19 番 1 号

TEL　092-871-6631（内線 2163・2164）